

## 平成 28 年度 第 3 回学校協議会記録

### 1. 校長挨拶

### 2. 今年度課題への取り組みの達成状況について

校長：

- ・入試制度の変化 調査書に中学 2 年次からの評定が入る、英語の外部検定資格を評価する、変化に対応して適正に選抜を行いたい。
- ・文化祭に 725 名来校（12%増）、体育大会をあわせると 1000 名を超える人が来校。
- ・進路の取組み 卒業生による講演会やハローワーク、中小企業家同友会等から講師を招き生徒対象の講演会、教員が企業に出向く研修を行った。
- ・「こころの再生府民運動」継続 2 学年生徒や生徒会執行部が地域清掃等の活動、卒業生の体育館シューズを東南アジアの国に送るなどのボランティア活動。
- ・その他の活動 文化部発表会（2 月）開催、人間福祉コースが恵我幼稚園でクリスマス交流会、環境コースがビオトープで交流会、書道部が商工会議所で書道パフォーマンス、芸文祭で奨励賞受賞（書道部、美術部、写真部、演劇部）。
- ・2 年生 1 クラスがインフルエンザのため学級閉鎖、2/17、2/18 に補充授業。
- ・本校卒業生 今年度の教員採用試験（高校体育）で合格、来年度 3 人の教育実習生予定。
- ・進路の実績向上 看護学校 7 名合格

《1 年主任、2 学年主任、3 学年主任、教務主任、進路指導部長、生徒会部長、生徒指導部長、総務部長、保健部長からそれぞれ今年度の達成状況を報告。》

Q：クラブ加入率を向上させるための手立ては考えているか？

生活困窮の為のアルバイト等は少ないのでは？

A：クラブに入っていないが、放課後に居残っている生徒がいる。彼らにアプローチしたい。

「クラブを楽しむ」ことを教えたい。「(5 月の) 連休明け」までにどれだけクラブに惹きつけられるかが勝負だと考えている。

Q：「ユニバーサル観点」の広がり、OJT が成果を挙げている。心がけていることは何か？

A：「自分が楽しく、いきいき働く」こと。子どもの前でも、職員の前でも。若手教員には「出来るか？」と問わず、「やるか」と問いかける。出来たときには褒め、失敗した時にはフォローし、一緒に悩む。職員の思いは生徒にも伝播する。

Q：個別に配慮が必要な生徒について、外部機関との連携体制は出来ているか？

A：スクールカウンセラー（SC）は月に 1 回来校。面談時間を細かく区切る必要が出るほど、生徒や保護者のニーズは高い。追加配当も申請している。

Q：少ない人数での対応は難しい。「チームで」「専門家の力を借りて」対応することが肝要。外部機関との連携をシステム化してほしい。

校長：「生徒サポート室」（教育相談係・支援教育コーディネーター）と学年が情報を共有する流れを作っている。その一方で SC や児童相談所に関する事案は全体で共有しにくいという課題がある。また、今年度新たに、平野区の「青春生活応援事業」としてドーナツトーク（一般社団法人）と連携して居場所事業を行っている。

A：「ドーナツトーク」は、他校で「居場所カフェ」という取り組みを行っている。本校では、気になる生徒を先生がピックアップして、図書室などの「居場所」でゆっくり話が出来る空間を作っている。生徒からすれば、先生でもない SC でもない人と話せる場所として、教員には話しにくいことも話せたりする例もあった。必要であれば、福祉機関につながることも

想定される。これからケースの蓄積を行っていききたい。

### 3. 学校経営計画及び学校評価について

校長より学校経営計画について今年度の評価と来年度の計画を資料に沿って説明。

評議員：それぞれの分掌長が言ったことをまとめてあり、分かりやすい。手法も含めて、綿密に計画を立てていて感心した。校長が独自で作られたのか？

校長：作成は校長。しかし、職員会議に出して意見を求めている。3月31日まで修正可能。

評議員：校長の一方的な押し付けではなくて、率直に意見を言える雰囲気づくりをしてほしい。それが、学校を元気にすることにつながる。

教頭：キーワードは大学の「入試制度改革」。今の中学2年生から大きく変わる。ペーパーテストよりも面接など、やる気やモチベーションが問われる形態が増え、同時に外部テストの重要性も増してくる。進学希望の生徒だけでなく、「全員に」検定などを受けさせることで、就職も有利に進めることが出来るようになるであろう。また、「行事に取組む力が将来評価されるようになる」ことを見据えて指導にあたるのが肝要。

評議員：「観点別評価」は高校でも行っているか？

校長：去年英語で先行実施。来年度全教科で実施。

評議員：(観点別評価に対応した)シラバスを作ることは大事。子ども達がシラバスを使うか、は疑問だが、教員が、どの観点で評価をつけるのかを明らかにすることに意義がある。生徒にとっては「どういう観点で評価をするのか」という「指針」となる。教員にとっては、子どもの成長の(具体的)イメージとつながっていくため、評価の仕方のレベルアップになる。教頭の指摘はあたっていて、「ともに学び、ともに育つ」「多文化にふれる」機会を増やすこと、「体験」をもとにした「人との出会い」が、知識だけでは解決できない課題を解決できる能力を育むことになる。先生方が「力を合わせてやっている」のが、生徒にも乗り移り、実績につながっている。「平野へ行きたい」生徒増えた。この3年は実を結んでいるのは、たまたまではない。「どんどん新しいことをやろう」という進取の気鋭も素晴らしい。

首席：オープンキャンパスについて、11月(62名)、12月(57名)、2月(30名)合計149名の中学生が参加。松原市、藤井寺市に比べて、大阪市からの参加が少ない。広報に力を入れたい。来年度は5回(10月、11月、12月、1月、2月)実施予定。リサーチをしてわかってきたが、大阪市内の中学校では、平野高校の「場所の認識」すら、あやふやな場合もある。普通科専門コース設置校として、コースがフラッグシップとなるように取組みたい。成果発表会や、クラブ活動、行事などを通じてスクールアイデンティティの確立を内外へむけて図りたい。今年度、学校訪問を沢山行った。評価の仕方、手法など、今持っている技術を活かしてこれからも学んでいかねばならない。

### 4. その他

教頭：来年度第1回協議会は6月中旬を予定。